

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02543

研究課題名(和文) クローデルの日本論に見られる東洋思想の影響と新トマス主義との関連についての研究

研究課題名(英文) A study on the relationship between Eastern thought and Neo-Thomism in Claudel's theory of Japan

研究代表者

大出 敦 (ODE, Atsushi)

慶應義塾大学・法学部(日吉)・教授

研究者番号：90365461

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1921年から1927年にかけて駐日フランス大使として日本に滞在したポール・クローデルが著した日本論から日本の古典文学・芸能、国学、神道、仏教・老荘思想からの影響を分析し、これらをクローデルがトマス主義と関連づけて理解し、自己の文学に反映させていく過程を明らかにするものであった。クローデルは、本居宣長、平田篤胤の国学思想からとりわけその死生観、魂観に関心を寄せ、それが彼の日本理解の基本となったことを浮き彫りにできた。さらにクローデルは、こうした国学思想をトマス・アクィナスを用いてスコラ学的に読み換え、日本の絵画や芸能は超越者を認識する媒介であると考えていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでのクローデル研究では、日本文化の理解者、紹介者という面の分析が強かったが、本研究では、クローデルが日本の古典芸能や古典文学を受容し、それを意図的にスコラ学で読み換えて換骨奪胎し、独自のものにしていくことを分析した。そのことによって単なる日本理解者・紹介者ではなく、クローデルの文学活動の本質的な部分で日本文化と関わっていることを明らかにできた。こうして得られた成果は、2018年の一連の企画、とりわけ神奈川近代文学館で行った展覧会と日仏会館で行った国際シンポジウムを行ったことで、日本のフランス学の基礎を築いたにもかかわらず、あまり知られていないクローデルを再評価する契機を作ることができた。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes the influence of Japanese classical literature, theater, Kokugaku, Shintoism, Buddhism and Taoism in the critique of Japan written by Paul Claudel who stayed in Japan as the French ambassador to Japan from 1921 to 1927. It clarified that Claudel understood these Japanese cultures and ideas in relation to Thomism and incorporated them into his own literature. Claudel was particularly interested in the view of soul from the ideology of Norinaga Motoori and Atsutane Hirata, and I was able to highlight that it was the basis of his understanding of Japan. I made it clear that Claudel used Thomas Aquinas to translate these ideas of Kokugaku and thought that Japanese painting and performing arts were mediators of recognizing Transcendent.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 日仏文化交流史 クローデル 比較文学 象徴主義 トマス・アクィナス

1. 研究開始当初の背景

(1) クローデル研究は、これまでフランスのポール・クローデル協会を中心に研究が進められてきたが、日本に関する研究は言語の問題もあってフランスではあまり進んでいない状況であった。しかし国内外の研究者のいずれもクローデルの日本滞在は、彼の文学活動に大きな影響を与え、転機となったという認識は広く共有されていた。

(2) 一方で、クローデルに能、文楽、歌舞伎といった日本の古典芸能や俳諧といった古典作品が影響を与えたことは、日本人研究者を中心に研究されてきた。その特徴は、能や文楽の形式的・様式的な観点、定型詩の俳諧の詩型との比較からの考察が中心であった。実際、能の複式夢幻能という形式が、後期のクローデルを代表する演劇作品、『クリストファー・コロンプスの書物』や『火刑台上のジャンヌ・ダルク』などに影響を与えていることはすでに指摘されていることである。

(3) しかし日本や東洋の思想、たとえば国学や老荘思想がクローデルの文学活動に具体的にどのような影響を与えたことはこれまでほとんど指摘されていなかった。本研究はこの研究の空白地帯を埋めるものであった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、クローデルへの国学・神道などの日本思想や老荘思想など東アジアに影響力のあった思想の影響を分析することにあつた。そのためにまずクローデルの一連の日本論を精読し、その註解・翻訳を行い、テキストの全容を明らかにすることを第一の目的とした。

(2) 上記のテキスト群の分析に基づいて、クローデルの日本論を分析し、本居宣長、平田篤胤などの国学思想および神道思想、老荘思想などからの影響関係を探ることを第二の目的とした。

3. 研究の方法

(1) クローデルの日本論に日本思想や東洋思想からの影響を見出すために、まずテキストを精読し、具体的にどのような影響が見られるかを具体的に考察した。当初、テキストとして選んだのは、日本の芸能に関する言及と『老子』『荘子』のエピソードが盛り込まれた対話篇「詩人と香炉」、日本論の中核で日本の古代の信仰に言及している「日本人の魂への一瞥」、国学者の本居宣長、平田篤胤の神道観・死生観と関連する「自然と道徳」「文楽」「日本文学散歩」であった。その後、「明治」「能」「西洋の表意文字」、また文学作品である『女と影』『四風帖』を追加した。

(2) これらのテキストの精読と並行して、クローデルの日本観を分析、考察した。この分析では、国学関係として本居宣長、平田篤胤、民俗学関係として柳田國男、折口信夫などのテキストとの比較を行った。一方、クローデルは日本語を解さなかったため、本居宣長や平田篤胤などを日本語で読んだとは考えられず、当時のジャパノロジストたちの著作を通して理解していったと考え、アーネスト・サトウ、W・G・アストン、ラフカディオ・ハーン、バジル・ホール・チェンバレン、ミシェル・ルヴオン、D・C・ホルトムなどの著作を調査し、ここからの影響関係を明らかにすることにした。

4. 研究成果

(1) 本研究では、クローデルの一連の日本論を通して、彼の思想面での日本理解を明らかにすることができた。

(2) クローデルの日本論としてまとめられているテキスト群の内から、「詩人と香炉」「日本人の魂への一瞥」「自然と道徳」「明治」「文楽」「能」「西洋の表意文字」「日本文学散歩」を選び、これらの註解・翻訳を試みた。また日本を題材にした、あるいは日本に関連した文学作品である演劇作品『女と影』と詩集『四風帖』もテキストに選び、同じように分析を進めた。これらはクローデルの日本での行動分析と、日本思想(国学や神道)、老荘思想の原典との比較という二つの点から考証し、文学作品の生成を明らかにした。たとえば「能」で言及されている作品は、ほぼすべてクローデルが実際に見たものであり、クローデルの日記と当時の上演記録を照らし合わせて、クローデルが観能したものを特定し、その上で平田篤胤などの唱えた死生観に従って複式夢幻能を理解していることを考証した。

(3) これらの作業と並行して、上記のテキスト分析に基づいた論考をそれぞれ発表した。「文楽」と「自然と道徳」の分析に基づき、「ものの『あま性』」を求めてクローデルの日本理解を作成し、『女と影』の分析に基づき、「天使と幽霊—クローデル『女と影』を巡って」を作成し、「日本文学散歩」「西洋の表意文字」「四風帖」の分析から「アリストテレスと唐辛子—クローデルのクラチュロス主義」を発表した。

(4) 以上の分析からクローデルの日本からの影響を次のように総括することができる。クローデルは、1921年からの駐日フランス大使として滞在し、日本の自然、文化、芸能などに接した。そこから得られたことは、次のようにまとめることができる。クローデルは、青年期にヨーロッパ社会を「唯物論の徒刑場」と形容したように還元主義的唯物論が支配していた世界への閉塞感を強く抱いていたが、それとは異なる非唯物論的な世界が日本にあることを発見した。つまり日

本にはヨーロッパでは周縁に追いやられ、否定されてしまった非物質的なもの、形而上的なものが存在する余地があるということを見出したのである。そのためにクローデルは次のような点を日本文化から導き出している。

ひとつは、クローデルはアーネスト・サトウなどを經由して、平田国学から日本型の死生観、魂観を吸収している。平田国学によれば、死者の魂という非物質的なものは、生者の世界にとどまって「草葉に陰」から生者を見守っているとするものであった。この点にクローデルは強い関心を示している。

もうひとつは、イギリスの人類学者コドリントンがメラネシアで見出し、当時、柳田國男や折口信夫が着目していたマナ・タイプの神観念にクローデルも着目していることであった。これは太平洋地域に見られる神観念であり、マナは一般に非人格的で超自然的な一種の力であるとされ、それが人や物に取り憑いたり、離れたりするということであった。このタイプの神観念をクローデルも日本の神観念の基本として認めている。

こうした日本の神観念をクローデルは、意図的に読み換えて独自のものにしていくのだが、この読み換えの際にクローデルが用いたものがトマス・アクィナスであった。クローデルは、トマスにならって可感的な存在と非物質的な存在とから世界が成り立っていて、可感的な存在を非物質的なものが包み込んでいると考える。この中世スコラ学的な世界観をクローデルは日本の死生観に見出し、日本では死者の魂は時間の経過とともに徐々に個別性を失い、祖霊から神一般へと収斂され、生者の世界を包み込むように見守っているという比較的素朴な平田の考えをもとに、祖霊＝神が、ユダヤ＝キリスト教的な超越者のように生者の世界を包み込むことで、生者のもとに臨在し、生者に存在の形相を与えていると読み換えている。その上で、この非物質的な存在を認識する装置として、日本文化は発達してきたとクローデルは主張し、能にしても水墨画にしてもこの目に見えない非物質的なものを感じ取るためのものとしている。そしてこれを自己の文学に反映させ、彼にとっての詩や演劇作品は、目に見えない超越的な存在を感じ取るための方法として位置づけられるようになったと結論づけた。

(5) 以上のような考察結果を得たが、こうして得られた知見は、前述のように論文の形で公表したが、論文発表以外に以下のような形で、成果を社会に還元した。2018年はポール・クローデル生誕150年の年にあたり、本研究の大出は「ポール・クローデル生誕150年記念企画委員会」の事務局長をつとめ、創作能『女と影』の上演、『百扇帖』コンサートなどの企画に携わった。なかでも大出が中心に関わったのが、2018年5月19日から7月16日まで神奈川県立神奈川近代文学館で開かれた「生誕150年記念詩人大使ポール・クローデルと日本展」と11月3日・4日に行われた「ポール・クローデル生誕150年記念国際シンポジウム ポール・クローデルの日本」である。

「詩人大使ポール・クローデルと日本展」は、1921年から1927年の日本滞在時のクローデルの文化・外交活動を時系列で展示し、クローデルの活動を包括的に紹介したものであった。この展示に際してもクローデルが日本の国学思想等から影響を与えたことが分かるよう、平田篤胤の『古史伝』、その翻訳紹介をしたアーネスト・サトウの文献等も展示に加えた。この展示会は神奈川県立神奈川近代文学館で初めて行った外国人文学者の展示会であったが、期日中、約3000人の来館者があった。

日仏会館で11月3日、4日に行われた国際シンポジウム「ポール・クローデルの日本」では、フランスからドミニク・ミエ＝ジェラール（パリ・ソルボンヌ大学教授）、パスカル・レクロワール（フランシュ＝コンテ大学教授）、カトリーヌ・マイヨー（セルジ＝ポントワーズ大学名誉教授）を招き、国内からは戦後クローデル研究の草分けである渡邊守章（東京大学名誉教授）、日仏会館館長の福井憲彦を始めとして、中堅・若手の研究者が集まり、二日間にわたって議論が繰り広げられた。大出は初日の11月3日に「ものの『ああ性』を求めて―クローデルの日本理解」と題した発表を行った。このシンポジウムの記録は、水声社より『ポール・クローデル日本への眼差し』として2021年3月に出版した。

(6) またこれまで考察したことをまとめ、『ポール・クローデル―日本を註解したフランス人』（仮題）として、単著として出版する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大出敦	4. 巻 20
2. 論文標題 喜多虎之助という男がいた	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 L'Oiseau noir	6. 最初と最後の頁 44 55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大出 敦	4. 巻 98
2. 論文標題 クローデルからマラルメへ 象徴主義者たちの 観念 論争	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 三田文学	6. 最初と最後の頁 117 125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大出 敦	4. 巻 139
2. 論文標題 天使と幽霊 ポール・クローデル『女と影』を巡って	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教養論叢	6. 最初と最後の頁 1 - 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大出 敦	4. 巻 19
2. 論文標題 神々のはざままで クローデルと日本の神性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 L'Oiseau noir クローデル研究	6. 最初と最後の頁 1 - 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大出 敦
2. 発表標題 ものの『ああ性』を求めて クローデルと日本文化
3. 学会等名 ポール・クローデル生誕150年記念シンポジウム ポール・クローデルの日本（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大出 敦
2. 発表標題 アリストテレスと唐辛子 クローデルのクラチュロス主義
3. 学会等名 クローデル・セミナー2021 クローデルとその時代
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 アルバム・クローデル編集委員会（大出敦 [編集責任者]、根岸徹郎、中條忍、渡邊守章、ミシェル・ワッセルマン、井戸桂子、中島悠子、村上由美、堀切克洋、学谷亮）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 136
3. 書名 詩人大使ポール・クローデルと日本	

1. 著者名 大出敦、中條忍、三浦信孝編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 387
3. 書名 ポール・クローデル日本への眼差し	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「生誕150年記念詩人大使ポール・クロードルと日本展」（於県立神奈川近代文学館、2018年5月19日～7月16日開催）の企画運営。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------